

## 横山ゆずり作 「一本の道」

### 前編

- (効果音) 電車の中(ゴトンゴトン・乗客のガヤ)
- 若者 男1 それでさ、今度のスキー合宿、白馬なんだけど、一緒に行かない？
- 若者 女 えー！ だって、あたし一度も滑ったことないんです。
- 若者 男2 大丈夫だって。おれが教えてあげるから。
- 若者 男3 お～、危ないぞ。
- 若者 男2 うるせえ。
- 若者 男1 ねえねえ、行こうよ。
- 若者 女 じゃあ、教えてもらおうかなあ。
- 若者 男1 やった。決まり。
- 若者 男2、3 おう。 よっしゃ。(口々に)
- 駅アナウンス 新宿 -、新宿 。お降りの方はお忘れ物をなさいませんよう、お気をつけください。(FO)
- 若者 男1 じゃ飲みながらスキーのこと、詳しく打ち合わせようぜ。
- 若者 女 はーい。
- 若者 男2 よーし、行くぞあ。(電車から降りていく。)
- 長谷川広一 はあー(ため息)。 やっと降りたぜ、あいつら。
- 相沢タカシ ああ。
- 広一 全く、どこの大学生だか知らないけど、いいご身分だよなあ。スキーだの飲み会だのってさあ。こっちは受験生だったのによあ。タカシ、おれらも来年は絶対に受かって、スキーにガンガン行こうな。
- タカシ ああ。
- 広一 あーあ、このくらーい浪人生活も、あと3か月の我慢だよなあ。おれもう、今度はどこでも受かった大学入るぜ。チクショー、それでサークル入って、合コンに出て、彼女つくって、スキーに行行ってやるー！
- タカシ 分かった、分かったから落ち着けて。
- 広一 これが落ち着いていられるかよ。この1年間、惨めな生活に耐えてきたんだぜ。あーあ、タカシ、お前はいいよな。K大だって、国立だって、ほぼ確実だって言われてるんだからな。本命はやっぱりあれか、K大の法学部？
- タカシ ...いや。
- 広一 じゃ、T大にチャレンジするのか？ まあ、お前なら本当に受かっちゃうかもな。タカシ、もしT大生になっても、おれを見捨てないでくれよ。
- タカシ バーカ。何言ってんだよ。それよりおれ、実は...実はさ、大学受けるのやめよう

かと思ってるんだ。

広一 え？ ウソ、ウソだろ。今更そんな、大学受けないだなんて。

タカシ いや、本気なんだ。実は少し前からいろいろ考えてたんだけど、最近やっと気持ちが決まってさ。

広一 お前、何弱気になってんだよ。この間の模試、そんなに悪かったのか？

タカシ そういうことじゃないんだ。

広一 じゃあ、どういうことだよ。

タカシ うん。おれ、大学に入って自分が何をやりたいか、分からないんだ。このまま大学生になっても意味ないんじゃないかって思ってさ。

広一 あーあ、ぜいたくな悩み。おれなんか、とにかく入れるんならどこでもいいぜ。

タカシ(ナレーション) おれは相沢タカシ。目下浪人中の身だ。それなりに目指す大学もあり、1年近く頑張って勉強してきた。でも勉強すればするほど、この勉強が何になるのだろうか、こんなにまでして大学生になって、おれは何をしようとしているのだろうかという疑問がわいてくるのだ。親の金を使って大学に行って、単位を取って、適当に遊んで、4年後に就職。何だか先が見えるような気がした。まだ入ってもいないのに生意気だと言われるかもしれない。でも、本当に勉強したいことが見つかったから大学に行くべきじゃないか、と思えてならないのだ。

広一 お前さあ、クソまじめに考えすぎるんだよ。どうせ社会に出て働くようになったら、あくせく忙しなきゃならないんだから、大学4年間は充電期間と思ってノンビリすりゃいいじゃん。

タカシ でも、おれの家、今そんな余裕もないんだ。

ナレーション 家の事情は本当だった。不況が続く中で、おやじの勤めていた会社も業績が悪化し、中間管理職のおやじも容赦なくリストラに遭った。子会社に出向ということで、失業は免れたものの、エリートサラリーマン街道を歩いてきたおやじには相当ショックだったらしい。もちろん経済的にも苦しくなった。

(タカシの家)

タカシ ただいま。

母 お帰り。どうだった、予備校のほうは？

タカシ どうって、いつもどおりだよ。

母 ならいいけど、あなたいきなり大学行かないなんて言い出すから、お父さんもお母さんもびっくりしちゃったわよ。本気じゃなかったんでしょ？

タカシ ……。

母 タカシ…。まさかあなた、お父さんの会社があんなことになたから、家に負担をかけまいとして、そんなこと考えたんじゃないでしょうね。そんな気を遣わなくても、うちなら大丈夫なのよ。あなたや麻衣を大学に行かせるくらいの用意はあるんですからね。

タカシ そうじゃないんだ。確かに父さんのことは考えるきっかけにはなったけど。

母 それじゃ、どうして？

タカシ 分からない。いや、まだうまく説明できないんだけど…。

母 そんなの、お父さんもお母さんも納得できませんよ。

タカシ もう行くよ。

母 ちょっとタカシ、待ちなさい。タカシ！

(効果音) (バタバタと階段を駆け上がり、自分の部屋に入りドアをバタンと閉める音。)

ナレーション その夜、おやじとの話し合いは、平行線のままだった。

父 どうしてだ。一体何が不満なんだ？

タカシ 不満なんかじゃないんだ。ただ自分のやりたいことが見つからなくて…。

父 甘ったれるな。そんなもの、大学に入ってから探せばいいじゃないか。

タカシ ダメなんだ。このまま入ったら、おれ絶対に流されてしまう。だから今、もう一度考えたいんだ。

父 何を考えるって言うんだ。「ヘタの考え、休むに似たり」だ。考えている間に動け。やるべきことをやってから、ゆっくり考える。

タカシ やるべきことって、大学に入るだけじゃないだろう。

父 今お前のやるべきことは、それだろう。父さんには、お前が逃げてるように見えるぞ。

タカシ 逃げてる？

父 そうだ。受験を目前に控えて怖くなったんだろう。落ちたらカッコ悪いから、あらかじめ逃げ道をつくっているんじゃないのか？

タカシ 違う！

父 じゃあ結果を出せ。結果を出して、お前が負け犬じゃないことを証明してみろ。

タカシ 大学に入らないと負け犬なの？ それじゃ“勝つ”ってどういうことだよ。いい大学に入って、いい会社に入って、それが人生に勝つってということなの？

父 そうは言ってないだろう。

タカシ そう聞こえるよ。確かに父さんは一流大学を出て、大会社に就職したよね。だけど今はどうだよ。簡単に会社に捨てられたじゃないか。それって、負け犬じゃないわけ？ 惨めにならないの？

母 タカシ、それ以上言ったら許しませんよ。

タカシ 父さんの人生は、本当にそれで納得できるの？ 守叔父さんと比べてみなよ。父さん今までずっと、「弟のやつは中学しか出てないから、あんな仕事しかできない」と言っていたけど、今はどうだよ。中卒でラーメン屋の見習いで働いて、ちゃんと自分の立派な店を持ってやっているじゃないか。リストラされてくすぶっている父さんなんかより、守叔父さんのほうがよっぽど偉いよ。

(効果音) (バシッと平手打ちの音。)

母 タカシ!  
父 そうか。お前は父さんのことをそんな風に思っていたのか…。もう勝手にしろ。  
ナレーション 父さんにあんなことを言うつもりはなかったのだ。いや、絶対に言うべきではなかった。本当に父さんのことを負け犬だなんて思っているわけじゃない。ただ、自分の気持ちをうまく言えないもどかしさから、思わずあんな傷つける言葉を吐いてしまった。親に八つ当たりしている自分が惨めだった。こんなことなら、いっそそのまま受験勉強にラストスパートをかけて、どこかの大学に滑り込んでしまおうか。そんな考えも思わずよぎった。でも、自分にウソはつきたくなかった。

(効果音) (部屋のドアをノックする音。)

麻衣 お兄ちゃん、いい?

タカシ 麻衣、まだ起きてたのか?

麻衣 眠れるわけじゃないじゃん。下であんなに大きな声出してるんだもん。

タカシ 聞こえてたのか。ごめん。

麻衣 別にいいけどさ。それよりお兄ちゃん、本当に大学行かないの?

タカシ うん、多分な。

麻衣 へえ、本気なんだ。…それじゃさ、もう受験勉強しなくていいんでしょ。あのさ、今度の土曜日、久しぶりに守叔父さんの店にラーメン食べに行かない? もちろんお兄ちゃんのおごりで。

タカシ 守叔父さんのとこか…。

ナレーション 父さんとの言い合いで、守叔父さんのことを引き合いに出したこともあって、何となく気持ちが引かれた。それに叔父さんはクリスチャンだった。神様や信仰のことなど、日ごろは考えたこともないおれだったが、今回は、何か、クリスチャンとしての叔父さんの話も聞いてみたくなったのだ。数日後、おれは妹の麻衣を連れて、叔父さんの店を訪れてみることにした。

(効果音) (雑踏)

(効果音) (店の戸をあける音。)

守叔父 はい、いらっしゃい!!

ナレーション 威勢のいい叔父さんの掛け声と共に、うまそうなラーメンのにおいが鼻に飛び込んできた。「おれは生きてるぞ」と言ってるようなその顔を見ながら、おれは、このごろめっきり暗くなった父の顔を思い出していた。

## 後編

守 はい、いらっしゃい!!

タカシ こんにちは。

麻衣 叔父さん、こんにちは。

守 あれ、何だ、タカシ君と麻衣ちゃんじゃないの。珍しいねえ、2人そろって。さ、とに

かく座んなよ。

店員

はい、2名様どうぞ。

タカシ

すみません、忙しいのに。突然来ちゃって。

麻衣

叔父さんのとこの特性味噌ラーメンが急に食べなくなっちゃって。

守

麻衣ちゃん、うれしいこと言ってくれるね。よし、サービスしちゃうよ。

ナレーション

店が一段落すると、叔父さんはおれたちを家に上げて、話を聞いてくれた。

守

え、タカちゃん大学に行かないのかい？ あんなに成績よかったのに、もったいないねえ。

麻衣

優等生は優等生なりに悩みがあるらしいんだ、これが。

タカシ

お前は黙ってる。...叔父さん、とにかくうちのおやじは何が何でも大学って人だから。叔父さんなら分かってくれるんじゃないかと...

守

ハハハ、そりゃ確かにおれは兄貴と違って、勉強はからっきしダメだったからなあ。

麻衣

あたしも!

タカシ

麻衣! 叔父さん、ごめんなさい。そういう意味じゃないんです。ただ、叔父さんなら、その何て言うか、世間一般とは違う価値観で考えてくれるんじゃないかと思っただけだから。

守

ほう。

麻衣

そっか。そうだよな。叔父さんはサラリーマンじゃないし、それにクリスチャンだし、やっぱりうちのお父さんとは、一味違うもんね。

タカシ

叔父さん、おれ、学歴とかを否定していいんじゃないんです。ただ、それを、何て言うか安全な人生のパスポートみたいに考えるのは嫌なんです。安易な気がして。叔父さんは、そんなものに頼らず、自分の腕一本で勝負してきたわけですよ。そこがすごいなあと思って。

守

なあに、そんなカッコいいもんじゃないよ、全然。それとタカちゃん、君は兄貴のこと、君たちのお父さんのこと、一つ誤解しているような気がするんだけどなあ。

タカシ

おやじのこと、誤解してる？ おれがですか？

守

ああ。

タカシ

どういうことですか？

守

うん。タカちゃんは「学歴を人生のパスポートにしたいくない」って言ってたけど、ッそのことを今、身に染みて一番感じているのはお父さんじゃないかなあ。もちろん今までの会社勤めでも感じてきたと思うよ。“何々大学を出ました”なんて言うだけで通用するほど、世の中の仕事は甘くないからね。そんな中で頑張っていて、家族や今の社会を築き、支えてきた。それがここへ来て、リストラだろ。今、まさに人生の不条理をかみ締めてるってとこじゃないかなあ。

タカシ

叔父さんは？ 守叔父さんはその“人生のフジョーリ”っていうのを感じたことは

ないの？

守 あるよ。大ありだよ。生まれた時から、出来のいい兄貴がいてさ。何やってもかなわなかったから、もう追いかけるのは止めたと思って、180度路線を変えたわけよ。

麻衣 どっちに？

守 悪いほうに。(笑い)勉強なんて、どうせできないんだから、そんなら最初からしない。まじめな兄貴にはできないような遊びも、片っ端からやったなあ。出、当然高校は行かない。というか、行けない。フラフラしているわけにもいかないから、紹介してもらったラーメン屋の大将に弟子入りしてな。あのころは、表面では突っ張ってたけど、不安もあったよなあ。

タカシ 叔父さんでも？

守 ああ。おれの人生、うまくいってもラーメン屋のおやじ止まりか、なんてさ。

麻衣 なーんだ、叔父さん、ほんとはラーメン屋になりたくなかったの？

守 始めはね。今は違うぜ。安くてうまいラーメンで、お客さんが体も心も温まってくれるのが、おれの生きがいさ。

タカシ それって、いつからそう思えるようになったんですか？

守 よくぞ聞いてくれました。あるきっかけがあったわけよ、おれの人生を変えるようなさ。

麻衣 わあ、何かドラマっばいよ、叔父さん。

守 そ、おれの人生、ドラマチックなんよ。

タカシ おれ、その話、聞きたいです。

麻衣 あたしも！

守 うーん、話してもいいけど…。

麻衣 叔父さん、もったいぶってる。

守 いや、そうじゃなくてさ。ただ話すだけじゃなくて、君たちにも実際に会ってもらったほうがいいと思ってさ。

タカシ その、叔父さんの人生を変えた方にですか？

守 まあ、そうだね。“人”って言うより“人たち”なんだけどね。タカちゃんと麻衣ちゃん、よかったら、明日の日曜の午後、おれといっしょに来るかい？

麻衣 行く！ あたし行ってみたい。お兄ちゃんも行くでしょ？ どうせ暇になったんだから。

タカシ じゃ連れてってください。

ナレーション 次の日の午後、叔父さんがおれたちを連れていってくれたのは、ある養護施設だった。

(効果音) (子供たちのにぎやかな声。)

守 こんにちは。

園長 ああ、相沢さん。いつもありがとうございます。あれ、今日は若い人もご一緒？

タカシ こんにちは。相沢タカシです。

麻衣 こんにちは。相沢麻衣です。

園長 あれー、相沢さん、こんな大きな子供さんいたの？

守 いや、まさか。<sup>おい</sup>甥と<sup>めい</sup>姪ですよ。

園長 そうですか。よく来てくださいましたね。ここは知恵遅れの子供たちの施設なんです。どうぞゆっくりしてらしてください。

タカシ 叔父さん、いつもここに来てるんですか？

守 いや、日曜だけだよ。午前中教会に行くだろ。そして午後はこっちに寄るんだ。ま、一緒に子供たちと遊んでもらってるようなものだけだな。

園長 相沢さん。この間の手打ちソバ実演、大好評でしたよ。よっぽど楽しかったと見えて、あれ以来、子供たちも“おソバのおじさん、また来る？”って聞くんですよ。

麻衣 へえー。お店で作って売ってるだけかと思ってたぁ。

守 この子供たちはさ、人懐こいんだよ。おれ、最初はボランティアなんて気負ってたけど、今はただ、この子たちに会いたくて来てるだけさ。

ナレーション 予想もしていなかったことで、初めは戸惑っていたおれと麻衣だが、子供たちに囲まれて一緒に遊んでいるうちに、不思議な温かさに包まれていった。  
(帰り道)

守 どうだ、驚いたか？ おれが柄にもないことをしてるんで。

タカシ 正直言って意外だったけど。でも、あの子たちと、おじさんの人生の転機と、どうつながるんですか？

守 ああ。じつはおれが若いころ世話になってた店で、あの施設出身の人も働いていたんだ。

タカシ え、就職できる人もいるの？

守 もちろんだよ。丁寧に教えれば、かなりの作業ができる人もいる。それに、絶対に手抜きをしないしな。

タカシ その人が縁で、あそこに？

守 うん。一度、車で送ってあげたことがあって、それからだな。あそこには、かなり重い知恵遅れの子もいるんだ。職員さんの話だと、練習しても、すべてのことが身に着くわけではないそうだ。脳の細胞は再生しないからな。でもだからと言って、あの子たちが学ぶことは無駄だって言えるか？ どうせ覚えられない、身に着かないから無駄だとは言えないよな。おれたちって、何やるんでも、“今これをしておくと後で楽だ”とか考えるだろ。逆に、余り将来役に立ちそうもないものは見向きもしない。おれもそうだった。でもあの子たちは違うんだよな。“今”を精一杯、全力投球で生きてる。無心で努力してる。そしてそれを心から喜んでるんだ。

タカシ 叔父さんの言う“おれたち”の中には、間違いなくおれも入ってる。自分の人生に意味を見つけないと思う余り、こうしたら将来どうなる、なんてことばかりに捕らわれていた。...でもダメだ。おれはそんな無心にはなれない。

守 何回か通ううちに、園長先生とも親しくなったんだけど、園長室には、こんな言葉の額が飾ってあるんだ。「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。」聖書の言葉だ。クリスチャンである園長先生の働きを支えてくれた言葉だそうだ。そしてその言葉どおり、安心してゆだねきって生きる子供たちの姿を目の当たりにして、園長先生はいつも教えられ、励まされたとも言ってたよ。

タカシ それで叔父さんも教会に？

守 ああ。まだ園長先生のようにはいかないけどな。でも、少なくとも“学歴”とか“地位”とかいったもので、変に劣等感を持ったり、先々のことで余計な心配をしなくなったな。キリスト教の神様って、何しろ、この全世界をつくった神様だからな。“ゆだねる”って生き方もいいもんだぞ。

ナレーション 店で久しぶりに会った時、「おれは生きてるぞ」と言ってるように見えた叔父さんの顔の輝きの秘密が、何だか分かったような気がした。ゆだねる、生き方。この中に、今のおれを変えてくれる何かがありそうな気がする。迷いに迷った先に、細い一本の道を見つけたような、小さな興奮がおれを包んだ。2月の身を切るような空気が、妙に心地よかった。

(完)